GS～ガンダムシステム

雪羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＧＳ～ガンダムシステム

【Ｎコード】

Ｎ３４３５Ｙ

【作者名】

雪羅

【あらすじ】

これはもし束さんが開発したのがＩＳじゃなくてガンダムだったら…。というお話です。登場する機体はガンダムだけです。

EPISODE1（前書き）

カオス物が好きな主が作った作品ですごゆっくりどうぞ。

EPISODE1

少年織斑一夏は困惑していた。その理由は…。

（覚悟していたがきついな…。俺以外みんなクラスメイトが女子なのは…。）

ＧＳ（ジーエス）。正式名称ガンダムシステムは本来女性のみ扱える兵器だった。しかし、彼は男性で唯一ＧＳを起動させたため、国立ＧＳ学園に強制入学させられた。

そう。彼が今いる場所こそが国立ＧＳ学園だ。今教卓の前で副担任の山田先生があれこれ説明をしている。他の生徒はそんなのお構いなし、とばかりに俺に視線を注いでいる。

ふと視線を左にやるとそこには幼なじみの篠ノ之箒がいた。俺の視線に気づくとふいっとそらされてしまった。

（箒…助けてくれよ…。）

そんな事を考えていると教室の扉が開いて一人の女性が入ってきた。ん？この威圧感、

つり上がった目、もしかして…。

「関羽！？」

べしっ！！

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者。」

おもいっきり出席簿で叩かれた。ちきしょう、痛てぇ…。こんな力、まるで千冬姉…、

あれ？千冬姉の声にどことなく…。

「織斑先生、会議は終わられたんですか？」

「あぁ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてしまってすまないな。ごほん！！

諸君！私が担任の織斑千冬だ！諸君らを一年で使い物にするのが私の役目だ。

教師の言ったことは覚えろ！！覚えられなくても覚えろ！！」

絵に描いたような鬼軍曹。これが俺の姉の織斑千冬だ。第１回ＧＳモンド・クロッゾ大

会で無傷での優勝を成し遂げた最強の称号「ブリュンヒルデ」を持

つ姉。弟としては微妙
な立場だ。
自己紹介も無事終わり、（頭部負傷者一名）二時間目までの休憩
時間となった。
「ちょっといいか？」
その声の方を向くと…、
「箒…。」
幼なじみが立っていた。

EPISODE1（後書き）

どうでしたか？戦闘はもう少し先です。

ＤＡＴＥ　ＦＩＬＥ（前書き）

この作品に関しての設定です。知りたい事がありましたら気軽に質問してください。

DATE FILE

DATE FILE（データファイル）

1．GS（ジーエス）

正式名称ガンダムシステム。操縦者に合わせてサイズは変化する。装着時は見たまま

該当するガンダム。篠ノ之束博士が開発した。女性のみ扱える設計となっている。

2．登場人物

織斑一夏（おりむらいちか）

世界で唯一GSを動かせる男性。試験会場にあった訓練GS「RX－78－1」を起動させてしまい、国立GS学園に入学することになる。自覚無しに女性をときめかせている。　本作品では唐変木は改善されている。

専用GSは「GN－001　エクシア」。

篠ノ之箒（しのののほうき）

一夏のファースト幼なじみ。小学校の頃、自宅の剣道場に通っていた一夏と稽古を共にしていた。心底一夏に惚れている。姉がGSを開発したため、小学4年の時に一夏と別れる。

専用GSは無し。

織斑千冬（おりむらちふゆ）

一夏の姉にして担任の教師。第01回世界GSモンド・クロッゾ大会を無傷で優勝した

過去を持つ。冷たい態度を一夏にとっているが心の底では一夏を気にかけている。

現役時代のＧＳは「ＧＮ－０００　オー」。

セシリア・オルコット

イギリス代表候補生。学園入試を主席で通過。自画自賛の傾向があり、あまり好まれる性格ではない。

専用ＧＳ「ＧＮ－００６ケルディム」。

DATE　FILE（後書き）

新キャラが登場したら随時ここに簡単な紹介文を載せていきます。

EPISODE2（前書き）

EPISODE2です。どうぞ。

EPISODE2

ここはGS学園屋上。他の女子生徒を振り切って俺と箒は屋上にたどり着いた。

「久しぶり。六年ぶりだな。」

「あぁ…。」

六年ぶりに再会した箒は以前よりも鋭さが増している。でも結構可愛くなったかも…。

「そういえばさ。」

「？」

「剣道全国大会優勝おめでとう。」

「な、何故お前が知っている！？」

箒は相変わらずの口調でそう言った。昔からこいつは男勝りな口調だったな。まぁ、それはそれで人の個性だけどな。

「何故って、実際に会場で観戦したからだよ。」

「なら一言くらい声をかけてくれれば良かったのだが…。」

箒は残念そうな口調でそう言った。

「だってさ、千冬姉に言われてたんだよ。試合が終わったら即座に帰れ、って言われてさ。

ほら、お前も知っているだろ。千冬姉に逆らうと…。」

箒の表情が徐々に凍り付く。

「あぁ…。なら仕方ないな。」

二時間目のチャイムが鳴る。

「やばっ！戻るぞ。」

「あぁ！」

全力疾走で教室に戻る一夏と箒。

「そういえばさ箒。」

「？」

「可愛くなったな…／／／」

「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／！！！！！！！」

教室に戻った俺達は千冬姉の出席簿アタックを喰らったのであった。

EPISODE2（後書き）

次はあの貴族様がご登場です。

EPISODE3（前書き）

ＥＰＩＳＯＤＥ３です。この話の中にでてくる表現はｒｉｈｉｔｏさん作「ＩＳ［インフィニット・ストラトス］　ＷＨＩＴＥ　ＢＬＡＤＥ　＆　ＬＩＯＮ　ＳＯＵＬ　－　」に登場するキャラ「リオン・マードック」から許可をもらって引用させていただきました。ｒｉｈｉｔｏさんありがとうございます。ではお楽しみください。

EPISODE3

（何なんだよ…、このＰＳ（フェイズシフト）装甲とかＧＮ（ジーエヌ）ドライヴとか…。）

一夏は困惑していた。教科書に載っている用語が理解できていなかった。

「あの―、織斑君？」

「はいっ！！！」

一夏は思わず大きな声を出してしまった。

「あの…、もしかして、怒ってます？」

怒ってるなんて滅相もない。

「いえ、ちょっと驚いただけです。すいません。」

「そうですか、良かったです。何か解らないところはありませんか？あれば言ってくださいね。私は先生ですから！」

この際言ってしまおう。

「先生！」

「はい、織斑君！！」

「全部解りません！！！」

ズガシャァァアアア！！！

何人かの女子がずっこけた。え？俺何か変な事言ったかな？

「織斑。入学前に事前学習書を読んだか？必読だぞ。」

事前学習書？もしかして…。

「古い電話帳と間違えて捨ててしまいました…。」

バシッ！！

千冬お得意の出席簿アタックが一夏の頭を狂い無く襲った。

「後で再発行してやる。一週間で覚えろ。いいな。」

「はい…。」

千冬姉に睨まれたらどんなに気の強い奴でもたじろぐな…。

そんな一夏の考えが読まれていたのか、再び出席簿が一夏の頭を襲った。

二時間目が終わり、休憩時間に入った。

「ちょっとよろしくて？」

そう声をかけてきたのは外国人だった。若干薄い金髪は腰のあたりまで伸びている。

制服はいかにもお嬢様らしいカスタムだった。ちなみにＧＳ学園は制服カスタム自由。

「ん？」

「まあっ！！私が話しかけているというのにそのようなお返事！！」

誰だっけ。俺この子知らない。ともかく伝えよう。言葉だ。

「悪いな、俺は君のこと知らないんだ。」

そう言ったらその女子はさらに驚いた。

「まぁ、この私を知らない！？セシリア・オルコット、イギリス代表候補生のこの私を！」

俺はセシリアが言った言葉の中に引っかかる節があった。

「一つ聞いて良いか？」

「いいですわよ。下々の声に答えるのも貴族の役目。」

何かいかにも上から目線。あんま好きじゃないんだよな…。

「……代表候補生って……何だ……？」

ドンガラガッシャーン！！！！！

クラス中の女子がずっこけた。……俺何か変な事でも言ったか？

「まぁ！！日本の方はここまで常識に疎いのでしょうか！」

こら待て。常識も何も俺はＧＳの事はここに来るまで何も知らなかったんだぞ。

「常識ですわよ、常識！！」

聞くだけ聞いてみるか。

「その代表候補生って？」

セシリアは腕を組んで説明を始めた。

「国家や企業の代表、その候補生、つまりエリートの事ですわ。単語から想像できるでしょう？」

なるほど。そう言うことか。

「そう、エリートなのですわ！私というエリートとクラスを同じにするだけでも奇跡！！幸運なのよ！！」

何か彼女の背景がバラになった気がしたが気のせいだろう。

「その事をもう少し自覚してくださる？」

「そうか。そりゃラッキーだな。」

あれ？セシリアが不機嫌そうな表情になった。

「馬鹿していますの…？」

「いいや。」

「男性で唯一ＧＳを起動させたと聞いて少しは期待していたのですが…、これでは…。」

俺に何かを期待されても困るんだがな…。

「まぁ、どうしてもＧＳの事が知りたいなら、泣いて頼めば教えてあげない事無いですわよ。下々の声に答えるのも貴族の勤め。それにエリートなのですから。唯一入試で教官を倒したエリート中のエリートですから。」

「入試って、ＧＳを動かすのだよな？」

セシリアは「それ以外に何があるのですの？」と答えてきた。

「俺も倒したぞ、教官。」

まぁ、向こうが突っ込んできて回避したら壁に激突してそのまま気絶しちゃったんだけどな。

「倒したのは……私だけと聞きましたが…。」

震える声でそう言ってきた。

「女子だけってオチじゃないのか？」

「あ、あ、あ、貴方も教官を倒したっていうの！！！！！！」

何か落ち着きが無い。とりあえず落ち着かせよう。うん、話はそれからだ。

「落ち着けよ、な？」

「こ、これが落ち着いて…。」

3時間目の始まりを告げるチャイムが鳴った。

「この続きはまた次で！逃げるんじゃありませんよ！」

誰が逃げるか。

「ではこれより、再来週行われるクラス代表対抗戦に出場するクラス代表を決める。ここで決定した者は今後生徒会会議への出席…、まぁクラス長と考えた方がわかりやすい。自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

こういうお堅い役目は他の人に任せればいいな。さっきのセシリアって子に任せればい

いかもな。こういうの引き受けてくれそうだしな。

「はい、織斑君を推薦します。」

なるほど、俺か。……。

「って俺ぇ！？」

「私も！！」

「私は…篠ノ之さんかな？」

俺の名前に混じって箒の名前が挙がった。

「え？何でなの？」

「知らないの？篠ノ之。ほら自ずと出てくるでしょ、天才のあの人が。」

その女子はなるほど！と手で相づちを打つ。あの人とは篠ノ之束。箒の姉さんにして、

ＧＳを開発した天才だ。そういえば今はどうしているんだろう。

「他にはおらんか？いないならこの二人で来週の実習時間に決定戦を…。「お待ちください！」」

千冬がそう問いかける。そこへ割り込んだ一声。その声の主は。

「納得がいきませんわ！こういう役目は私こそ適任ですのに！！」

セシリアだった。エリートである自分が推薦されなかった事に腹を立てている。

「第一、こんな文化が後進的な島国に来てるだけでも耐え難いのにこの様な屈辱を一年間も味わえと！！」

「島国って、イギリスも同じだろ。」

「日本と同じにして貰いたくありませんわ！」

ったく、頭が固い奴だ。もう少し柔軟な思考を持とうぜ。

「こっちも言わせて貰うけどよ、イギリスだって大したお国自慢無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ…。」

「何ですって！！イギリスにだって美味しい料理はありますわよ！！」

まずい、怒らせた。ここは引き下がって事を片付けよう。

「ごめん、こっちが悪かった。クラス代表は譲るよ！」

それを聞いて少し落ち着きを取り戻したセシリア。

「まぁ、たとえ勝負をしても私の勝ちは見えていますわ。唯一男性でGSを起動させた織斑さんならまだしも――」

「―所詮姉の七光りで入学した篠ノ之さんに私が負けるはず…。」

「……。おい。今何て言った。」

「はい？」

「取り消せ。」

「??」

「取り消せって言ってんだよ!!!!!!!今貴様が言ったことを!!!!!!!」

ちきしょう、感情が抑えれない!

「何を突然…!」

セシリアは驚いていた。誰だって突然こんな事を言われたら驚く。

「確かに箒の姉は束さん、ここへの入学も他の人よりはしやすいかもしれない。だけど、七光りとかそういうので一概にするな!!」

「そんな事…!!」

「そんな事? ふざけるな!! 箒にとって、『篠ノ之束の妹』の肩書きが、どれだけ重たく、辛いのか知っているのか!!!!!!!」

一夏は怒っていた。箒と自分を重ねていたからだ。

箒の場合は『篠ノ之束の妹』の肩書き。

一夏は『世界最強の織斑千冬の弟』の肩書き。これで中学校時代、ネタにされて一夏は虐められていた。箒も『篠ノ之束の妹』の肩書きで小学校

の時、転校していった。

そういう経験があるから、完璧にとまではいかないが箒の気持ちも理解している。

「倒す…。」

「？」

「セシリア・オルコット！お前を来週の決定戦で倒してやる！！」

「何を急に…！先程譲るとおっしゃったのは貴方で…！」

「そこまでにしろ！！オルコット、お前も先程の発言は良くない。織斑、お前も怒りすぎだ。この決着は来週のＧＳ実習の決定戦で行って貰う。では山田先生、授業を。」

箒は一人考えていた。

（一夏が…あそこまで…。）

EPISODE3（後書き）

どうでしたか？戦闘は話の進行具合からしたら一～二話くらい先です。

EPISODE4（前書き）

EPISODE4です。

EPISODE4

ようやく一日目が終わり、俺は帰ろうとした。

『生徒の呼び出しをする。一年生織斑。大至急学生寮事務室まで来るように。』

千冬姉に呼ばれた。学生寮事務室？何故だろう。俺は学生寮に向かった。

「織斑先生、お話って…？」

「お前の生活のことだ。事情があってな、今日から寮で生活することになった。」

「え？俺って自宅通学だったんじゃ…。」

「モルモットになりたいのか？」

「いいえ…。」

その一言で俺は沈黙した。まぁ、妥当な理由だけど…　。

「もう部屋は決まっている。１０３４号室だ。間違えるなよ。」

「はい。」

１０３４号室前に着いた。ここが俺の部屋か…。

一夏は扉を開いた。まず目に飛び込んできたのはベッドだ。見ただけでもフカフカ感が
伝わってくる。そこらのホテルよりよっぽど質が良い。流石国立。
「すげぇ…。」
「誰かいるのか？」
「！！！！」
女子の声。それはシャワールームから聞こえてきた。慌てる一夏。
「あぁ、同室になった者か。これから一年間よろしく頼む。」
声が徐々に聞こえやすくなってくる。近づいている証拠だ。
「こんな格好ですまない。シャワーを使っていた。」
（やばい…、あれ？でもこの声どこかで…。）
「私は篠ノ之箒――――」
シャワールームから出てきたのは６年ぶりに再会した幼なじみだった。その姿はタオル
一枚という異性に見られたらとてもじゃ済まないくらい恥ずかしい姿だった。
「ほ、箒…／／／／／／／／」

「い、一夏…／／／／／／／／」

綺麗できめ細かな肌をまだ乾ききってない水滴が滴る。それは一夏からはとても妖艶に

見えた。

「み、見るなぁ！！！！！！」

「ご、ごめん！！」

慌てて背を向ける一夏。その顔は真っ赤だ。

「な、何故お前がここにいる…？」

「な、何故って、俺の部屋だから…。それよりも着替えてくれ…、目のやり場に困る…。」

「わ、解った。」

慌てて箒は着替えを始めた。

「にしても、まさかお前と同室になるとはな…。」

「あぁ、俺も驚いたぜ。」

二人はベッドに腰掛けて話していた。箒は制服ではなく道着に着替えていた。箒だから

なのか、とても似合う。

「お、お、お…。」

箒がもじもじしている。どうしたんだろう？

「お前から希望したのか、私の部屋にしろと…／／。」

「そうできたならそう言ってたさ。」

「？」

箒はきょとんとしていた。そうできたなら、そうしていたって…、もう私と同室って

決まっているではないか…。

「ほら、俺の入学って、かなり特殊じゃん。だからさ、千冬姉が緊急で用意したらしいんだ。」

「そうか…。」

「でも、俺は箒と同じ部屋になれて嬉しいぜ。」

その言葉を聞いた箒は表情が明るくなった。

「そうか、それは何よりだ！ではこれから一年間よろしく頼む！」

「おう！」

俺と箒は握手を交わした。

翌日、朝のＳＨＲにて…。

「織斑、ＧＳの事だが…、訓練機が用意できない。学園の方で専用機を用意することになった。」

その言葉にクラス中がざわついた。

「この時期に専用機…？」

「それって政府からの支援が出るって事よね…？」

「いいなぁ―、私も専用機欲しいな…。」

専用機ってそんなに凄いのか…。

「届き次第受け渡し及び適合化（フッティング）を行う。忘れるなよ。」

そして受渡日…。まさか決定戦当日とは…。

「織斑。これが、お前の専用機ＧＮ－００１、エクシアだ。」

目の前には待機展開された専用機、「エクシア」が時を待っていた。この時を。

「背中を預けるように、そうだ。」

一夏の体にエクシアの装甲が装着されていく。一夏からしたらその感覚は一体化、と

言える。

「よし、発進時間だ。準備は良いな。」

「はい。」

千冬の言葉に一夏はきちんと返事をする。

「一夏。」

箒が声をかけてきた。

「勝てよ、必ず、信じている。」

その言葉に勇気づけられた俺は指で「ありがとう」のサインを送る。

「発進タイミングを織斑君に譲渡します。」

山田先生がそう言ってきた。

「織斑一夏、エクシア発進します！！」

カタパルトから発進したエクシア。その背中からは設置されているＧＮドライヴで発生

したＧＮ粒子が美しくに尾を引いていた。

アリーナバトルフィールドにはすでにセシリアが専用機「ケルデ

ィム」を装着して待機
していた。
「逃げなかったのですわね。」
「そっちこそ。」
「先日は申し訳ありませんでした…。素直に失言を認めますわ。」
その言葉は一夏にとって意外だった。まさか謝ってくるなんて。
「解ってくれればいいさ。でも―。」
「それと勝負は別ですわ！」
ケルディムの主力武器「ＧＮスナイパーライフルＩＩ」がエクシアの胸部を直撃した。
「ぐぁぁっ！」
それを受けて吹っ飛ぶが体勢を立て直し、右腕のＧＮソードのライフルモードでケルデ
ィムを撃つ。しかし、簡単に避けられる。
「さぁ、ワルツの始まりですわ！！」
ケルディムの背部から何かが射出された。それはそれぞれ自動で動き、エクシアに向か

ってビームを発射する。

「これがこのケルディム最大の特徴、ＧＮシールドビットによる全方向攻撃です

わ！」

くそっ！厄介だ、こいつは格闘型！接近できなければ意味が無い！ん？何故だ。あいつ、ライフルを発射してこない。もしかして…。試してみるか。

「はっ！」

エクシアは下半身背部に取り付けられたＧＮダガーを抜き取り、それをビットに投げつけた。それは見事に命中し、爆発した。

「何ですって！？当てた…。」

「ようやく解ったぜ。ビットは自己行動ではなく、お前が指示を出している。そして俺の反応が一番遅い角度から攻撃してくる。俺はさっき意識して反応の遅い角度を作った。そこへ攻撃をすれば破壊できる。」

セシリアにとって図星だった。まさか読まれてるなんて。

あっけなく射出されたビットは破壊された。しかし…。

「ビットは１１機ありましてよ！」

そう、搭載されているビットは１１機。射出していたのは９機。一夏は不意を突かれ、

ビームを受けてしまった。

「一夏！！」

煙が発生し、安全が確認できない。司令室で千冬が呟く。

「機体の能力に救われたな、馬鹿者。」

煙が晴れたそこには赤く輝くエクシアがいた。

――――トランザムシステム発動――――

そうエクシアのモニターに表示された。トランザムシステム。一部のＧＮドライヴだけに搭載されているシステム。高濃度圧縮ＧＮ粒子を全面開放し、機体のスペックを３倍相当まで上昇することが可能――。以上教科書から引用。

「はぁっ！！」

残りのビットを破壊し、ＧＮビームサーベルを抜き、一気にケルディムに接近する。

「くっ……！」

ビームの刃がケルディムを斬りつける直前、ビームの刃が展開を停止した。

機体の赤い輝きも沈黙し、動きが止まった。

――――シールドエネルギーゼロ。戦闘続行不可能――

『勝者、セシリア・オルコット。』

「……。」

――負けた。俺は。

「全く、よくここまで持ち上げてくれたな馬鹿者。」

全く嬉しくない褒め言葉を千冬姉がくれた。

「にしても、何で負けたんだ？」

「トランザムシステムは、高濃度圧縮ＧＮ粒子と並行してシールドエネルギーも消費する。それでシールドエネルギーが空になった。」

「なるほど…。」

「まぁ、今回は自動発動だったが訓練すれば自在に発動できるようになる。お前ならな。」

「お前なら？なぜそう言い切れるんだ？」

千冬はフッ、と微笑み口を開いた。

「私の弟だからな。」

その言葉は下校している今も耳に残った。

「一夏、惜しかったな。」

「あぁ、すまないな、お前に特訓してもらったのに…。」

「いや、相手は代表候補生、あそこまで戦えたでか良い方だ。」

「箒！」

「な、何だ？」

箒は突然大きめの声で名前を呼ばれて少し驚いた。

「これからも特訓に付き合ってくれ。」

「そうか、そうか。仕方ないな、よし、これからは共に特訓をしよう！！」

「ありがたい！」

シャァァァァァァ……。

シャワールームにはシャワーが流れる音が響く。そこには先程一

夏と戦ったセシリア・
オルコットが立っていた。
無駄の無く引き締まった体型。胸はそこまで大きくないがその大きさが体の見た目のバ
ランスを整えているので本人としては複雑な心境だ。
（織斑……一夏……。）
（あの瞳は……。）
彼女の母親は今の女尊男卑の社会になる前からいくつもの企業を経営する人だった。
母は自分に対して厳しかった。それでも母を尊敬し続けた。いつか自分もあのような女性
になりたいと。
一方父親は名家に婿入りしたせいか、いつもオドオドして母の機嫌を伺っていた。その
時からセシリアは決めていた。―将来あのようなひ弱な男とは結婚しないと。
ＧＳが発表されてから父の態度はますますひどくなった。
そして、両親は事故死した。一説は謀殺説がささやかれたが、事

故現場がそれを否定し
た。ホテルが崩れ、２００人近い死者が出た。あの日、二人は何故一緒にいたのか。
それからオルコット家の莫大な遺産を狙う輩が現れ始めた。遺産を守るべく、必死で勉
強した。
そしてＧＳ適正が高い事が発覚。国からは遺産を守るための様々な好条件が出された。
そして、稼働データの為に日本のＧＳ学園にやって来た。
そして出会ってしまった。自分の理想の瞳を持った男と。迷いもなく、曇りもない。
実直な瞳を持った男と。
（織斑…一夏…）
その名前を浮かべるだけで胸が熱くなる。
「もっと知りたい、彼のことを。もっと近づきたい、彼に。」
その声はシャワーの音で消えていった。

EPISODE4（後書き）

ガンダムの戦闘シーンって難しいですね。さて次回は幼女…じゃなかった、中華少女が登場します。お楽しみに。今回からアニメっぽい次回予告を入れます。

【次回予告】

「ねぇねぇ誰あの子？」

「代表候補生にして織斑君の幼なじみ！？」

「彼を取り巻く女性って多いね…。」

「次回もお楽しみに！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3435y/

GS～ガンダムシステム

2011年11月10日11時08分発行